ハードウエアの変遷にみるオーディオメーカーの歴史　[特別編]

バッファローの歩み(1)

メルコの誕生と黎明期のオーディオ製品

柴崎 功　SHIBAZAKI Isao

40年前に音響機器メーカーとして創業し，糸ドライブプレーヤーで脚光を浴びた「メルコ」は，1981年からパソコン関連事業へ進出し，今では「BUFFALO」ブランドで世界に知られるメーカーに成長した．最近は「N1シリーズ」の高音質NASを商品化するなど，再びオーディオ界で注目される存在になったので，オーディオ関連事項を中心に同社の歴史を紹介しよう．

メルコ時代に大ヒットした
糸ドライブプレーヤー 3533システム

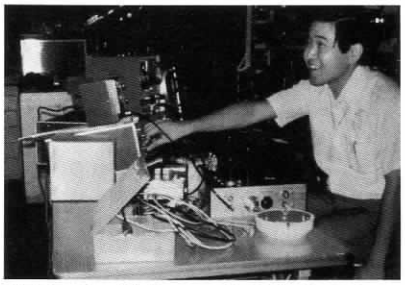
創業者のプロフィール

創業者でメルコホールディングス代表取締役会長の牧誠氏は，1948年4月29日に名古屋市昭和区で誕生．血液型はAB型だ．氏は高校時代から半導体や真空管のアンプを自作し，大学院卒業のころには真空管と半導体に精通したエンジニアに成長．学生時代から秋葉原の音響機器メーカー「ジムテック（JMTEC）」でアンプ開発のアルバイトをして（**写真1**），**写真2**～**4**の真空管アンプを相次いで開発．『無線と実験』などのオーディオ誌にも真空管アンプや半導体アンプの製作記事を多数発表した．

1973年に早稲田大学大学院の理工学研究科を卒業すると，その腕が見込まれて1973年4月にジムテックの正社員となり，音響機器の開発や設計を担当した．

メルコの誕生

1975年になるとジムテックの業績が低迷したので，4月に同社を退社して名古屋の実家に戻り，同年5月1日に個人経営の音響機器メーカーMELCO（メルコ）を創業した．MELCOはMaki Engineering Laboratory COmpanyの略で，「牧技術研究所」を意味して



[写真1]　試作アンプを測定するジムテック時代の枚誠氏

[写真2]　牧氏が設計した，ジムテックの電源分離型1チャンネル真空管プリアンプM-1（発売時価格69,800円）．4台のM-1に給電できる別売の電源ユニットM-1sは59,200円

[写真3]　牧氏が設計したジムテックのKT88プッシュプル50W＋50W真空管パワーアンプM-100．ピークワットメーターやスピーカーセレクターなどのアクセサリーが付いている．（1973年8月発売，発売時価格129,000円）

[写真4]　これも牧氏が設計したジムテックKT88プッシュプル50W＋50W真空管パワーアンプM-100SL（1974年5月発売，発売時価格159,000円）．1973年の第1次石油危機で物価が高騰したので，アクセサリー類を省いたのにM-100より高価になった

いる．メルコのデビュー作は後で述べるイコライザープリアンプEP-10で，**タイトル写真**の糸ドライブプレーヤー3533システムを発売した1978年8月に，同社は株式会社メルコになった．

個人経営のメルコ時代は**写真5**に示すように自宅が本社を兼ねており，**写真6**の試聴室で音質評価が行われた．牧誠氏は1977年2月に廣美夫人と結婚し，当初は夫婦でハンダ付けをして製品を作っていたが，需要が増えて家内工業では追いつかなくなると製造を外部に委託し，メルコは開発と設計に特化したファブレス企業になった．

音質と信頼性を重視したアンプ

アンプのデビュー作は，1975年9月に発売された真空管イコライザープリアンプEP-10（**写真8，9**）である．これはトーンコントロールなどのアクセサリー回路を省いて信号経路を簡素化し，音質的にも信頼性の面でも定評のある高級パーツを投入していた．当時の広告には「信頼のEP-10」と謳われている．特に注目されたのは，EP-10に動作時間計と称するテルモの銀電量計（**写真10**）が内蔵された点である．これで実際の通電時間が把握できるので，真空管の交換時期が一目瞭然だ．銀電量計はガラス管ヒューズのような外観で，電気分解と電気メッキの原理を応用している．具体的には電極が付いたガラス管に電解液とギャップつき銀柱を入れた構造で，直流を印加すると＋側は銀が電解液中に溶解し，－側は同量の銀が析出するので，銀に挟まれた電解液ギャップが電力量に応じて移動する．電力量は電力と時間の積なので，電力を一定にすれば通電時間計になるのである．

写真11は姉妹機のフラットプリアンプFP-11で，その内部は**写真12，13**のようになっている．これらのプリアンプとペアになる真空管パワーアンプが，**写真14～16**のEL34プッシュプルパワーアンプMPA-10である．初段とドライブ段にはテレフンケンの中μ双3極管ECC802S，抵抗にはアーレン&

［写真6］ 1977年7月時点のメルコ本社（牧宅）試聴室．壁に定在波防止用の凹凸を設けた広い部屋で，真空管アンプ用に高能率スピーカーシステムが3系統設置されている

［写真5］ メルコ本社兼自宅前で撮影した牧誠（社長）と廣美（専務）夫妻．向かって左側の門柱に「MELCO」，右の門柱に「牧」の表札がかかっている．1977年7月24日筆者撮影

［写真7］ 名古屋市中区大須のラジオセンター1階にあったメルコ直営販売店「メルショップ」．中央が牧誠社長，右が小池昌尚店長，左はアルバイトの大学生

［写真8］ 1975年9月に発売された真空管イコライザープリアンプEP-10（発売時価格84,500円）．操作系は入力セレクター／フォノインピーダンス／テープモニター／ローカット／バランス／ボリューム／電源スイッチというシンプルな構成（写真提供：ハイファイ堂）

［写真9］ EP-10のリアパネル．3本の真空管はシールドカバー付きで，本体の蓋を開けずに交換が可能．右の2本がECC803Sで，左端がECC83である（写真提供：ハイファイ堂）

1978年に，メルコはノンサーボの同期モーターで，絹糸を介して慣性モーメント3.5トンcm^{2}の高慣性ターンテーブルを駆動する糸ドライブプレーヤー3533システム（**写真18**）を発売．その重厚で艶やかで伸び伸びした音質が話題になって3533は大ヒットし，メルコの知名度が上がってアンプの売り上げも増えた．1979年になると慣性モーメント6トンcm^{2}の上位モデル3560（**写真19**）と，2トンcm^{2}の下位モデル3520を発売して糸ドライブプレーヤーの選択肢を拡張．各システムの構成パーツを単売して，予算に応じたさまざまな組み合わせや，パーツのアップグレードを可能にした．しかし糸ドライブプレーヤーがブームになると，中堅メーカーのマイクロ精機が糸ドライブプレーヤーを発売．これによりメルコのシェアが急速に低下した．

パソコン関連事業への進出

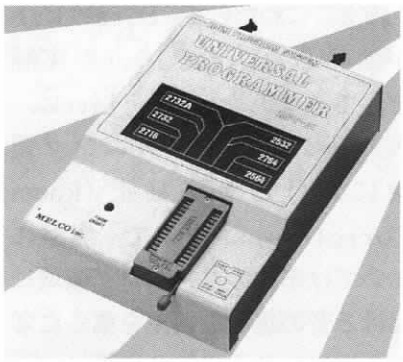
危機感を抱いた牧氏は，当時徐々に普及しつつあったパソコン関連事業への進出を模索．**写真20**のP-ROMライターを商品化したところ予想外に売れたので，本腰を入れて**写真21**のプリンターバッファーを発売したら大ヒットした．当時のパソコンは並行処理ができなかったので印刷中はパソコンが使えない．そこでプリンターの代わりに印刷用データを高速で受け取り，内蔵メモリーに蓄積してパソコンを即座に開放し，プリンターへは印刷ペースに合わせて蓄積データを送るというプリンターバッファーを開発した．これをパソコンとプリンター間に挿入すれば印刷中でもパソコンが使えるので，当時誰もが待ち望んでいた製品なのだ．

そしてプリンターバッファーのbufferと水牛のbuffaloをなぞらえて，プリンターバッファー以降の製品にはBUFFALO（バッファロー）のブランドが使われるようになり，2003年には会社名を株式会社メルコから株式会社バッファローに変更．同時に持株会社メルコホールディングスを設立して，株式会社バッファローは事業会社になった．（つづく）

【取材協力】
株式会社メルコホールディングス
●代表取締役会長：牧誠氏
●社長室：田淵一裕氏

株式会社バッファロー
●グローバルデザイン室長：小幡真也氏
●新規事業部オーディオ事業化準備係係長 シニアプロダクトプロデューサー：荒木甲和氏

【写真提供】
●バッファロー：タイトル写真，写真1，7，20，21
●ハイファイ堂：写真8，9，14，15，16
●MJ編集部：写真22
●『無線と実験』広告から引用：写真2，3，4，10，17a，18
●筆者撮影：写真5，6，11，12，13，17b，19



［写真20］ 1982年に発売された，P-ROMにプログラムを書き込むP-ROMライター RPP-01（発売時価格45,000円）

［写真21］ 1982年に発売された初期のプリンターバッファー群．パソコンに内蔵する基板型と外装をつけた外付け型がある

［写真22］ 牧誠氏の近影（2015年7月13日，メルコホールディングス本社ビルにて．MJ編集部撮影）

［写真18］
メルコの名を一躍有名にした糸ドライブプレーヤー3533システム．1978年8月発売（発売時価格480,000円）

［写真19］
1979年7月に発売された糸ドライブプレーヤーの最高峰モデル3560システム（発売時価格635,000円）